いのちへの証言

大企業ユニチカが
隠しつづけた職業
病を告発する闘い

矢吹紀人

《著者》
矢 吹 紀 人
1953年，東京都に生まれる．
慶応大学経済学部卒業．
著書『夜明けの旗』『湘南学園物語』
『企業社会の扉をひらけ』など．

いのちへの証言
——大企業ユニチカが隠しつづけた
職業病を告発する闘い——

1988年8月13日第1版第1刷発行
1988年9月12日第1版第2刷発行　定価 1,300円

著　者　矢　吹　紀　人
発　行　京都労災職業病対策連絡会議
602 京都市上京区上立売千本東入上ル
姥ケ寺の前町902 電話(075)451-4409

発　売　株式会社　機関紙共同出版
602 京都市上京区新町通丸太町上ル
春帯町350　電話(075)252-1788

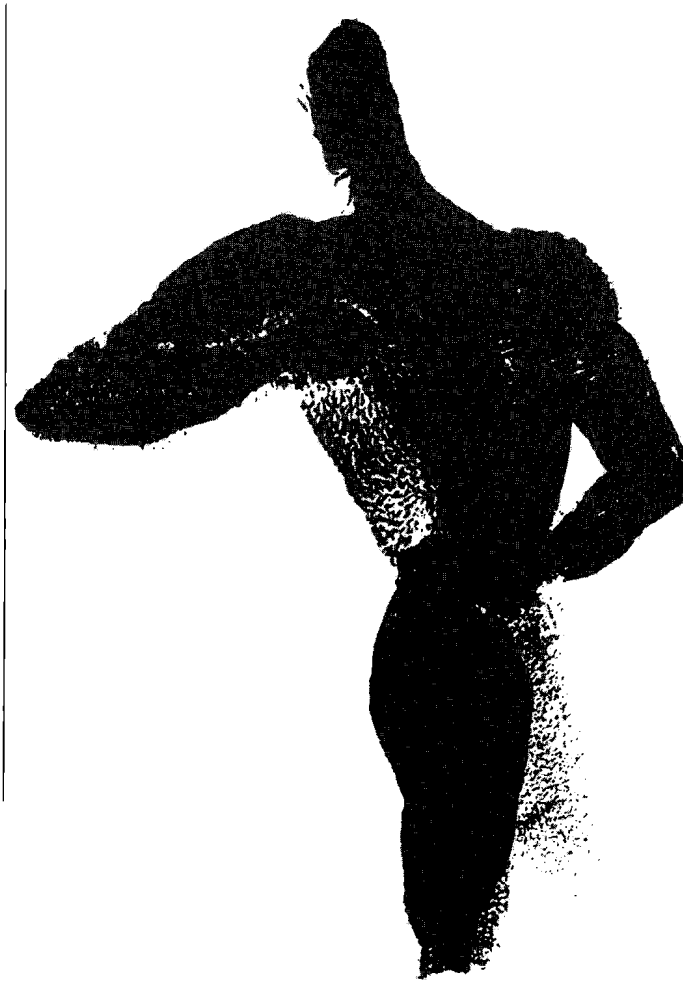
印刷所 ㈱京都機関紙印刷センター　製本 藤原製本株式会社

ISBN4-87668-056-6

いのちへの証言

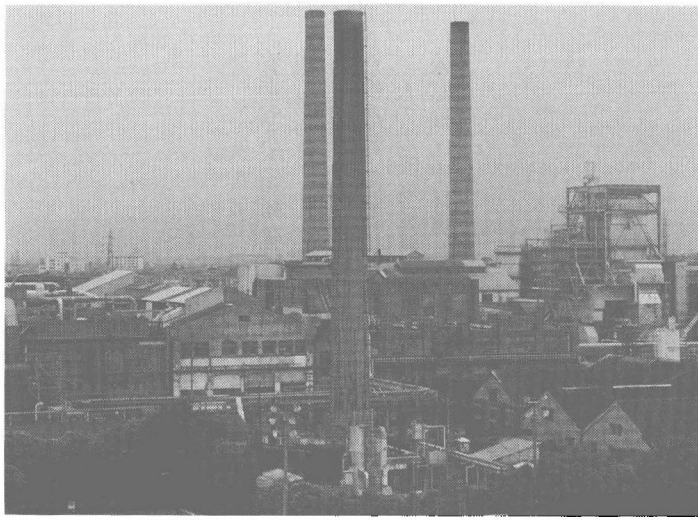
大企業ユニチカが隠しつづけた職業病を告発する闘い

矢吹紀人



装幀　横内　勇

ユニチカ宇治は
ＪＲ宇治駅に隣接した
広大な敷地をもつ工場である
煙突は
市内のどこからでも見える



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

有毒ガスと知りながら
隠しつづけてきたユニチカの
企業責任を問うため
京都地裁に提訴した
三人の労働者（写真、向って左より）
永富稔・中村勇・祐谷保

序にかえて

企業のヘイを越えた人間の結びつき

慶応義塾大学経済学部教授　黒川俊雄

本書『いのちへの証言』は、ユニチカ宇治工場の二硫化炭素中毒症労災認定闘争の記録であるが、私が大学で長年「社会政策」の講義のなかで、労働災害・職業病問題についてしゃべってきたことが、実になまなましくまざまざと描き出されている。一般に、事故による業務上の負傷、疾病、障害、死亡よりも、事故によらない疾病、障害、死亡の認定が困難であるといわれているが、本書では、ユニチカの労働者が二硫化炭素中毒症についてまったく知らなかったところからはじまり、その患者を、会社に気がねして耐えている労働者がきわめて多いなかから見つけだし、労災を申請して認定させるために、二硫化炭素ガス濃度測定の切り札が会社側に握られているなど、不利な条件のもとで、厳しい認定基

準を突破するまでの苦労を実に克明に描写している。

しかも、たたかわない労働運動の潮流をつくりだしている「連合」結成に力を注いだ「同盟」傘下の労働組合がこの労災申請に冷たく、患者を見殺しにするような情況のもとで、会社だけでなく化学繊維協会もレーヨン製造が労働者を二硫化炭素中毒症におとしいれることを知っていながら、利潤追求を優先させるために、その防止対策をとろうとしないことに対して、ユニチカの職場の「潜在患者」だけでなく、「転身援助制度」でユニチカを退職させられた「潜在患者」にまで手をさしのべ、しかもユニチカが宇治市民に公害問題をひきおこすほど二硫化炭素ガスなどを排出しているという情況のもとで、まさに「労働者と住民が企業のヘイを越えて手を結ぶ」社会的包囲網を企業に対してつくりあげていった経過を物語っている。これこそがこの闘争の勝利へのカギであったし、労災認定闘争だけでなく、産業「空洞化」といわれる現在の事態に対して、眞に雇用・生活をまもる新しい労働運動再構築のあり方を示すものである。

このような新しい労働運動は、企業を破壊しようとするものではない。それは、企業が利潤追求のために労働者の健康を破壊しようとすることから労働者をまもり、企業と社会のあり方を根本的に変革しようとするものである。なぜ企業と社会のあり方を根本的に変革するところまでいかなければならないのだろうか。現に労災認定闘争は勝利して、労災

が認定されたにもかかわらず、ユニチカという企業は一貫して責任を回避しつづけているので、認定された三人の労働者の裁判闘争があらためておこなわれているように、「人間性尊重」などを標榜する財界・企業はあいかわらず人間性を無視しているからである。

ではこのユニチカ労働者の労災認定闘争は何を勝ちとったのだろうか。それは、本書が生き生きと描き出しているように、この労災認定闘争を、「企業のヘイを越えて」支援した労働者と住民の自己変革および人と人との結びつきにほかならない。この貴重な〝財産〟を大切にして人間らしく生きることを追求する労働運動の再構築を願って、私は本書を心から推薦したいと思う。

「どうでもええわ、ほっといてや」からの闘い

全日本民医連会長　莇　昭　三

〝世界一金持ち〟を作り上げてきた日本の独占資本の手法を暴きだし、その犠牲者が立ち上がる姿の記録は、読むものに強い感動と勇気を与えてくれる。

熊本の興国人絹の二硫化炭素の事件は一九六四年に明らかにされている。そしてその同じ犠牲者が二十年も経た今も発生していることは、日本が狂っていることを、まざまざと示しているのである。

一人の労働者が、「一本の電話」から自分の職場を点検し、仲間を誘い、勉強し合い、医

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

療の専門家にも協力を求め、「会社人間」にさせられている被害者を説得し、地域の労働者の協力をえて、この狂い―企業と、それに飼育されている「労働組合」と、そしてユニチカ中央病院―を暴いてきたユニチカの労働者の困難な闘いが、生き生きと語られている。

臨調行革路線のもとで産業の空洞化が押し進められているが、そこで働く人々が黙っていれば、これまで以上の、そしてもっと多様な労災・職業病・公害が押し付けられるにちがいない。今の「会社社会」のなかで、労働者の権利を守り、そして地域の公害を無くし、民主的な社会を作る闘いの一つの教科書である。

「いのちへの証言」に記されているユニチカ宇治工場の労働者の闘いは、あらためて人間としての証しが何かを人々につきつけているような気がする。

この本の発刊に努力された京都労災職業病対策連絡会議の方々の慧眼と執筆された矢吹紀人氏に心からの敬意を表したい。

いのちへの証言　目次

●序にかえて
企業のヘイを越えた人間の結びつき　慶応義塾大学経済学部教授　黒川　俊雄　6
「どうでもええわ、ほっといてや」からの闘い　全日本民医連会長　茹　昭三　9
プロローグ　涙を越える時 ―――― 15
第一章　舞いおりた闘いのたね ―――― 23
ひとすじの糸をたぐって・24　隠されていた事実・30
患者を捜せ・41　重かった〝健康〟の二文字・52
知らされた大きな壁・61　いのちを奪う職場で・67
人間を信じて・74
第二章　いのちへの証言 ―――― 81
絶望の五年間・82　闘いは始まった・94
隠せぬ企業犯罪・103　圧力――揺れる患者・109

支えるのは人間・116　揺らぐ企業・122
越えられなかった壁・127　お父さん生きてよ・133

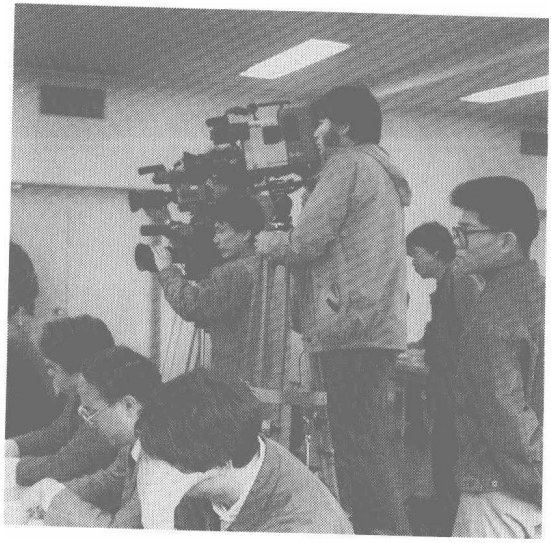
第三章　包囲される企業犯罪

すりかえられた鳳凰・140　つながりを求めて・146
命運をかけて・151　願い広がり・163
私たちの望むものは・171　医療の民主主義・181
人を動かすもの・187

第四章　タンポポのたねよ飛べ

何を勝ちとったのか・198　大空へ飛ぶ子らに・203
〝企業〟は誰のものか・208　闘いは今日も・214
涙から明日へ・223

あとがき・227



京都地裁に提訴の日
つめかけた報道陣
大企業ユニチカに対する
二硫化炭素中毒患者の闘いは
多くの市民に知らされた

プロローグ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com